

季刊

2006年 冬号 / 第12号

海堡

編集・発行 / 東京湾海堡ファンクラブ
会長 小坂一夫

発行日 / 2006年1月30日

kaihou

東京湾海堡ファンクラブニュース

No.12

題字は、明治39年10月1日陸軍大臣寺内正毅から外務大臣林董宛に提出した文書（外交史料館所蔵）より抜粋。
紋様は、尾形光琳：『八橋蒔絵硯箱』東京国立博物館所蔵より。

目次

- 「品川台場」見学会報告
- 品川台場 佐藤正夫
- 第5回シンポジウム報告
- 幹事選任について
- 追浜ケーソンヤードでの活動
- ドンタクなしの海堡建設と富津の人々
高橋在久
- 会則／コラム【山県有朋】／入会案内

「品川台場」見学会報告

東京湾海堡ファンクラブ会員 前田格・高橋照一郎

東京湾海堡ファンクラブ第8回見学会を下記の要領で実施しました。20名の参加がありました。小春日和のなか、日の出棧橋に集合後、水上バスに乗船して海上から台場を眺め、お台場海浜公園で下船し、公園整備された品川第三台場を回り、最後はレインボーブリッジを歩き、上方から台場全景を見学しました。

品川台場見学会〔第三台場ほか〕

講師：佐藤正夫氏（港湾経済学会理事、『品川台場史考』著者）

日時：平成17年11月26日（土）12：15～15：30

■行程■

日の出棧橋（12:35）→〔水上バス〕→お台場海浜公園（12:55）
→〔徒歩〕→品川第三台場見学（13:00～14:00）→〔徒歩〕
→レインボーブリッジ（橋の上から第三台場と第六台場を見

学）→芝浦埠頭駅（ゆりかもめ線）15:30 解散

【日の出棧橋～水上バス】

日の出棧橋において、佐藤講師より東京港の開発史や晴海、豊洲、品川埠頭の各施設について解説していただき、水上バスからそれらを見学しました。水上バスは第三、第六台場の間を抜けて台場公園に至るルートをとるため、台場を海上から見学することができました。



写真-1 水上バスからみた第六台場、環境保護のため上陸できない。



写真-2 水上バスからみた第六台場（左）、第三台場（右）とレインボーブリッジ。



写真-3 水上バスからみた第三台場。

【お台場海浜公園にて】

お台場海浜公園で下船後、水上バス乗り場から第三台場へとボードウォーク上を歩きながら、お台場海浜公園の歴史経過やレクリエーション活動、臨海副都心計画、水質浄化の方法について解説していただきました。



写真-4 見学会の参加者の皆さん。
中央が佐藤氏。

この水域は、昭和50年代まで貯木場として利用されていましたが、昭和60年に水域部を拡張して公園として埋め立て整備されました。この砂浜は自然のものではなく、臨海副都心計画に併せて造成されたものです。開園後はボードセーリングの利用が多いようですが、見学日は風が弱いこともあり、2艇しか見ることはできませんでした。また、有明の浄化施設で処理された海水が放流され、日の出棧橋付近とくらべ、水がきれいです。

【第三台場にて】

第三台場においては、品川台場の建設やその後の経緯、護

岸の構造、第三台場内に残る各施設について解説していただきました。



写真-5 佐藤氏の説明をきく参加者の皆さん。

ペリー来航を契機に計画された品川台場は11基でしたが、そのうち、築造されたのは施工途中で放棄されたものも含めて7基でした。その後の埋立てや航路確保のための撤去により、現存するものは第三台場と第六台場の2基となっています。現存する2基の台場は、大正期に史跡として指定され、そのうち、第三台場は昭和3年に「台場公園」として開園し、その後、東京港の防波堤整備により陸続きとなりました。



写真-6 第三台場は、開港当時(1941年ころ)の防波堤とつながり、陸続きになっている。写真手前の石積みが防波堤。



写真-7 第三台場は、史跡公園として整備されている。

第三台場の護岸の石垣は、布積みの辺と乱積み（又は谷落し）の辺の二種に大別されますが、何れも基礎部に松杭を打ち、胴木を組んだ上に施工されている他、海側にも多数の松丸太が打たれているとのことでした。石垣は震災などにより一部破損がありましたが、その都度補修され、現在に至っています。また、石垣上部には忍び返しのように張り出した石が用いられています。石垣には参加者の興味も強く、用いられた石の産地や積み方に関して多数の質疑が出されました。

第三台場内部の見学時には、現存する施設や遺構の築造年代について分かり易く解説していただきました。一瞥すると、どれも古い遺構のように感じられますが、史実に基づいていない大砲の台座のレプリカやバーベキューピットのような、築造当時のものとは関連性の無い、誤解を招きかねないものも残存しています。対策が必要ではないかと思いました。



写真-8 史跡指定された1926年ごろに作られたと思われる大砲の台座のレプリカが置かれているが、設置経緯などは書かれていない。

【レインボーブリッジから】

お台場海浜公園側からレインボーブリッジにのぼり、30分

近くかけて芝浦口まで徒歩でわたり、台場を鳥瞰しました。



写真-9 レインボーブリッジを歩く。

その規模の大きさを目の当たりにして、江戸末期の海防にかける人々の熱意を体感できる最適の場所ではないかと思いました。

また、東京港を左右に見ることができ、コンテナターミナル、橋、台場と時代の変遷を実感いたしました。



写真-10 レインボーブリッジから第三台場をみる。



写真-11 レインボーブリッジから第六台場をみる。

【見学会を総括して】

佐藤講師からは、品川台場史に止まらず、東京港の開発史や現在の東京港の機能までも含めた幅の広い解説をしていた。台場の史跡としての価値から現代的な意義までを感じることができ、とても興味深く、有意義な見学会となりました。佐藤講師に対し参加者を代表して深く御礼申し上げます。



写真-12 写真中央が佐藤氏。

品川台場（見学会資料）

日本港湾経済学会 理事 佐藤正夫

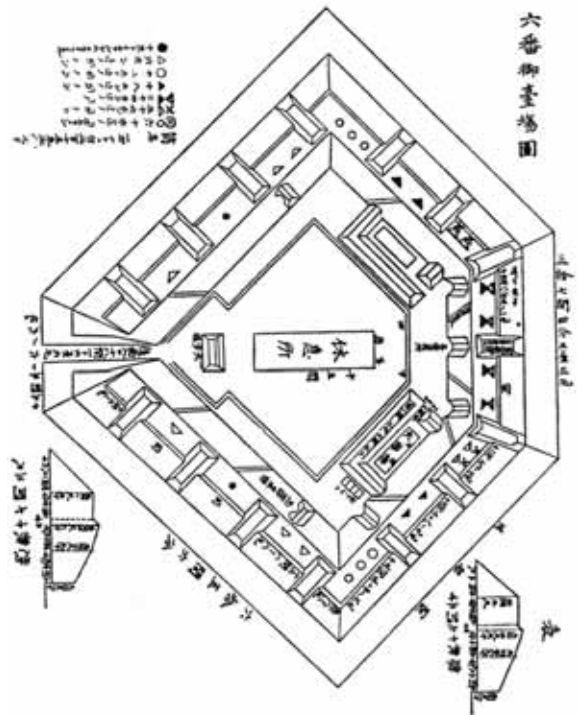
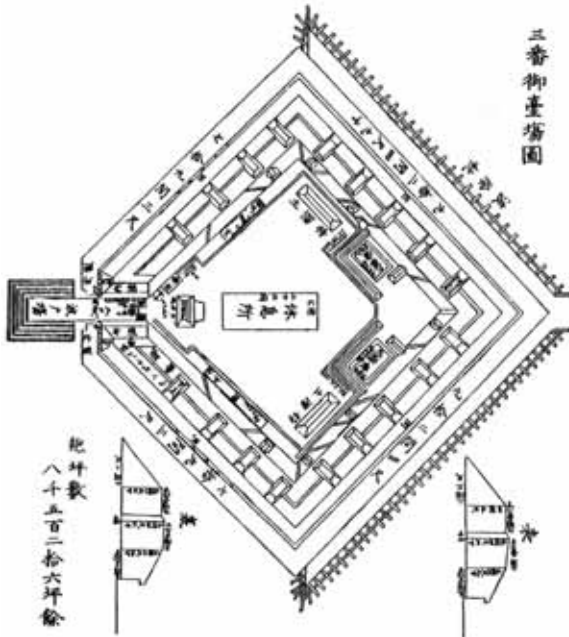


台場埋立設計及び予算概要

予算額 - 上段陸軍歴史、下段品川町史 位置図

台場	形状	水中埋立	立坪	予算額 (品川町史)	落札金額	品川町史 調	市公債調	定出債所 調	東京府 測量費調	概	要
1	6方5割	1丈1尺9寸	26,241.7	12,400円 (13,926)	同 15,226.2 日積り 150日	同 10,275	同 10,276.9	同 10,714.9	同 10,355.6	請負人 大工棟梁 平内大隅 工期 嘉永6年8月21日着工の～同7年4月竣工 同年5月18日行家各台場を視察する	
2	6方5割	9尺4寸	19,818.4	11,400 (11,590)	12,690 日積り 100日	-	10,276.9	9,986.7	10,468		
3	5方5割	9尺	19,351	11,390 (11,344)	12,384 日積り 100日	9,063	8,526	8,891.1	7,800		
4	6方5割	9尺6寸	13,573.8	6,956.1 (同上)	7,324 日積り 80日	5,815	7,386	5,815.9	5,369	請負人 御勘定所御用達 岡田次助 工期 安政元年1月着手～同5月4日 中止命令	
5	6方5割	7尺8寸	8,895.6	5,267 (同上)	5,823 日積り 80日	-	5,773	6,451	5,667.1	請負人 御勘定所御用達 岡田次助 工期 安政元年1月着手～同12月25日 竣工	
6	6方5割	6尺9寸	5,924.1	無記載 (5,676.2)	6,284 日積り 80日	5,860	5,432	6,630.1	5,451.5	請負人 大工棟梁 平内大隅 工期 同上	
7	5方3割	6尺3寸	5,924.1	3,575.1 (同上)	3,681 日積り 80日	-	-	-	-	請負人 御勘定所御用達 岡田次助 工期 安政元年5月4日 中止命令	
御勘山下 台場	-	-	-	-	-	-	7,386	-	-	請負人 北品川宿の平寄 利兵衛、徳三郎、徳之助、赤坂出馬町土方重 兵衛、渡部本村町家持ち渡石衛門 工期 安政2年2月12日行家各台場を視察 嘉永7年11月10日着手～安政元年12月15日 竣工	
8	6方5割	7尺	6,543.1	無記載	4,785 日積り 80日	-	-	-	-	請負人 大工棟梁 平内大隅	
9	6方5割	6尺3寸	5,924.1	3,618	4,024 日積り 80日	-	-	-	-	請負人 御勘定所御用達 岡田次助	
10	6方5割	6尺3寸			3,258.2 日積り 50日	-	-	-	-	請負人 武州葛飾郡 柴又村平寄 五郎右衛門	
11	6方5割	6尺3寸			3,390 日積り 50日	-	-	-	-	細田村名主 真右衛門	

資料出典：1 陸軍歴史 2 東京市史稿巻海欄 3 品川町史 4 江川庵全集 5 東京市公債課 6 日本財政経済史料 7 日本土木史。
注：落札金額の欄の数字は、同の下は記入せず。



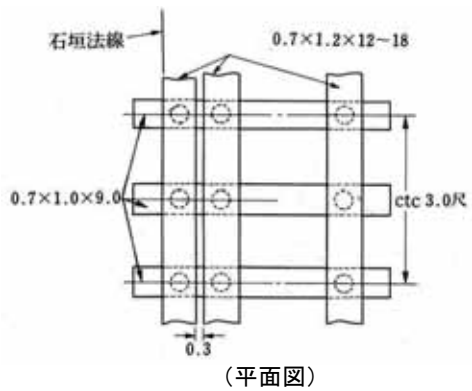
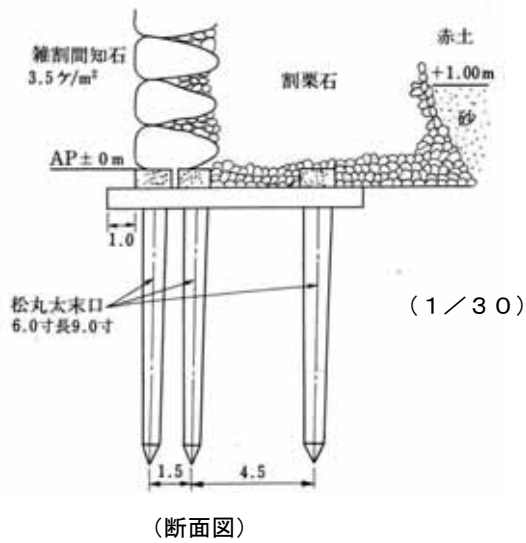
左右の二図は勝海舟著「陸軍歴史」より

品川台場の石垣及び基礎構造

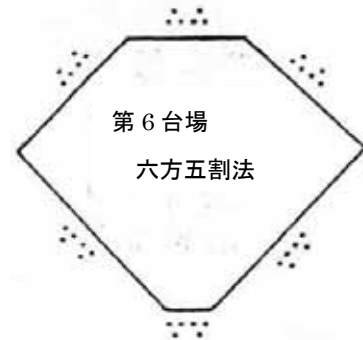
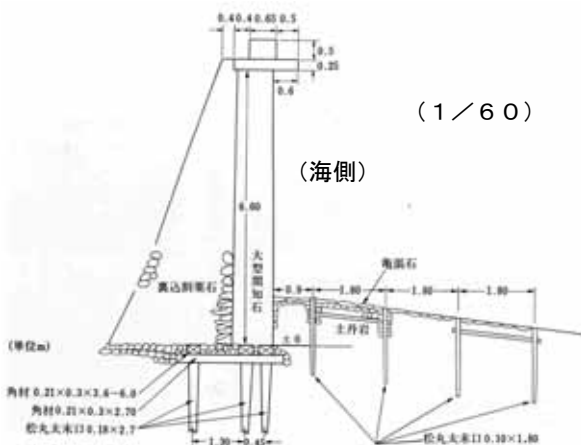
(東京都港湾局蔵)

品川台場の石垣の積み方

品川台場の石垣 (十露盤敷)



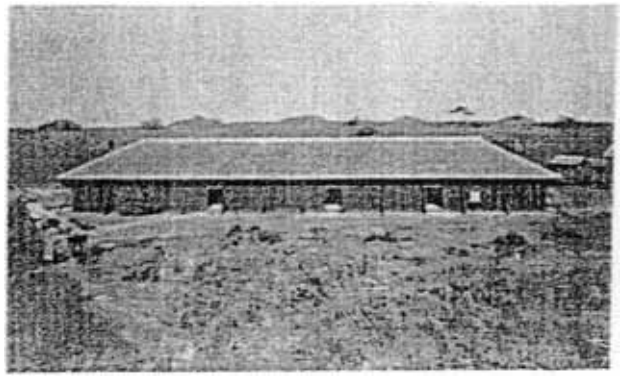
品川台場の石垣 (標準断面図)



凡例	布積み	ヨヨ
	乱積み	●●●
	亀甲積み	■

品川台場陣屋の図

五ノ御台場陣屋之図



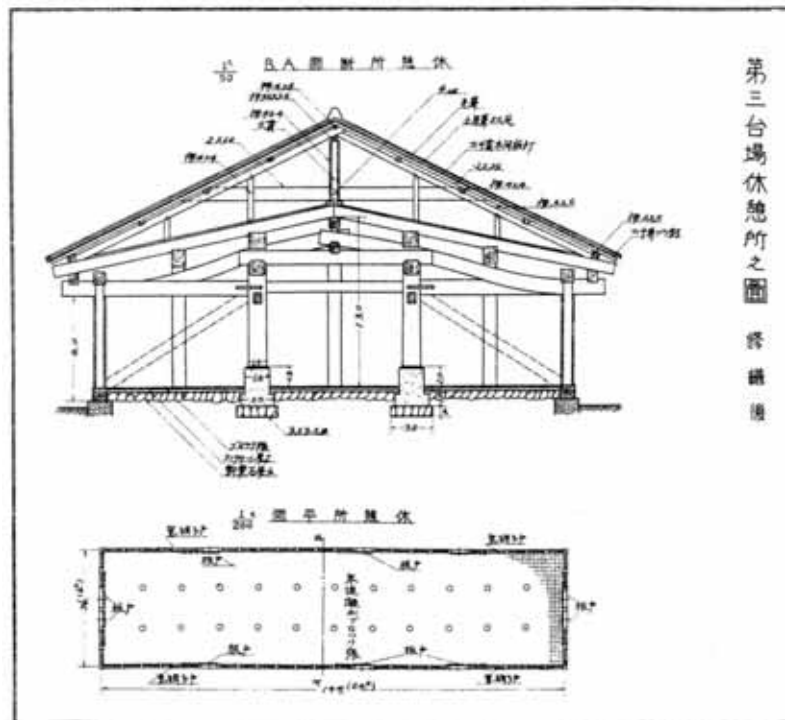
写真① 第三台場休憩所（関東大震災後の修繕）



写真② 第三台場休憩所（関東大震災後の修繕）

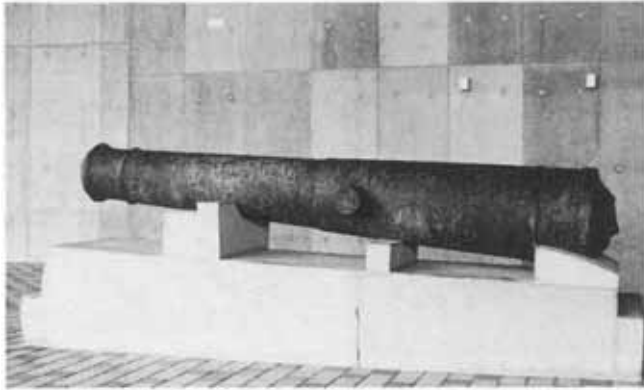
写真①②とも「品川台場」東京市保健局公園課、1925年より

鶴岡市郷土資料館寄託小林家文書より



第三台場休憩所之図（修繕後）「品川台場」東京市保健局公園課、1925年より

品川台場の備砲及び反射炉



写真③ 品川台場に設置されていた鉄製 36 ポンド砲
(佐賀県立博物館蔵)



写真④ 青銅製 80 ポンド陸用カノン砲 (東京都靖国神社遊就館所蔵)

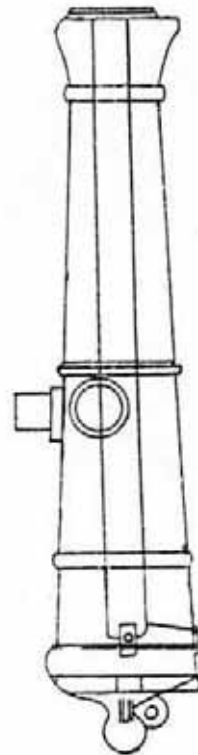
全長 3,830 口径 250 ミリメートル

安政元年 (1854) 江戸湯島馬場大筒鑄立場で鑄造し、
品川台場に据付けられていた

加農砲は、視認できる目標に対して直接射撃するため、高初速で弾丸を発射するもので、その弾道は平曲線 (抵伸弾道) を描く。

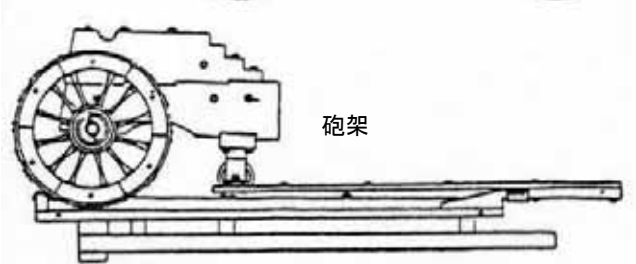
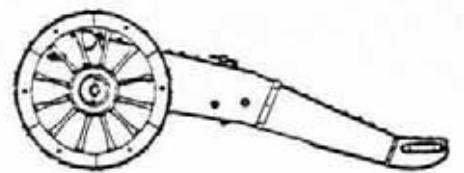
榴弾砲は、遮蔽されて視認できない目標に対して間接射撃を行うため、遮蔽物を越えて射撃が出来るように比較的遅い初速で弾丸を発射し、弾道は高くカーブを描く。

迫撃砲は、榴弾砲と同様の目標に対して、更に近距離から常に射角 45 度以上で発射し、大落角で着弾させ外の方法では攻撃不可能な目標物を攻撃する曲射弾道をもった火器である。口径が非常に大きく、短身砲で攻城砲として多く用いられる臼砲もこれに入る。



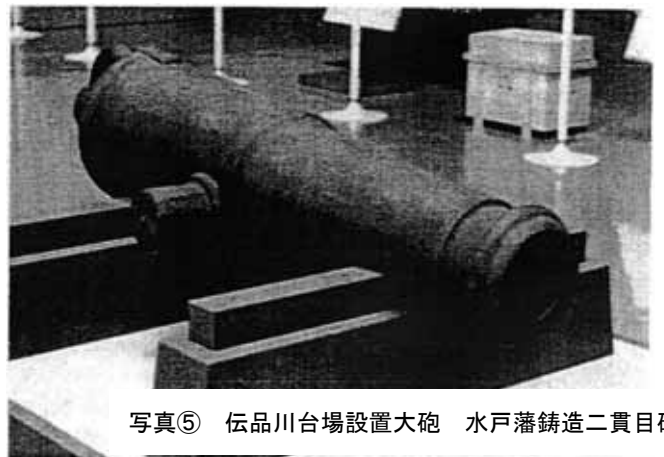
鉄砲三十六ポンドカノン二十分の一縮図
口径 五寸七分三厘 総長 一丈七寸三分
寸中長 九尺一寸 平均重貫凡 千百四十七貫八百錢余斤ニシテ
砲身 九尺七寸二分 七千七百七十四斤

砲車



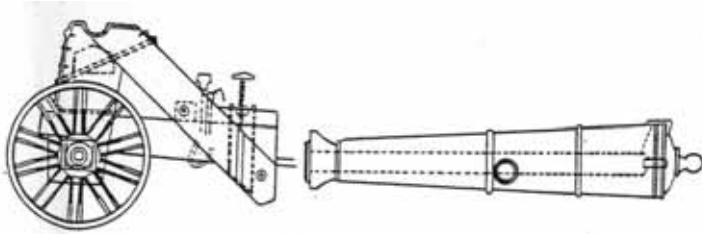
砲架

上、下図とも「佐賀藩銃砲沿革史」より



写真⑤ 伝品川台場設置大砲 水戸藩鑄造二貫目砲

ヨーロッパでは口径 11cm、運搬 2 人以上を砲と称した。江戸時代は弾丸重量により 30 匁以下を小筒、30～100 匁を中筒、100 匁以上を大筒（大砲）、1 貫目以上を石火矢と称した。



鉄製 24 ポンドカノン

・鉄製大砲（カノン）

6 ポンド（所要鉄量 1250 kg）

8 ポンド（所要鉄量 1600 kg）

12 ポンド（所要鉄量 2700 kg）

24 ポンド（所要鉄量 3500 kg）2 炉必要

36 ポンド（所要鉄量 4500 kg）2 炉必要

150 ポンド----- 4 炉必要

第 5 回シンポジウム報告

第 5 回海堡シンポジウムを 2005 年 12 月 17 日（土）、台東区社会教育センターで開催し、23 名の参加がありました。詳細は次号に掲載いたします。

〔講師・内容〕

●文化庁文化財部参事官付 文化財調査官 北河大次郎氏
「近代化遺産の保存活用について」

●「東京湾海堡ファンクラブのロードマップ（長期目標）」
について自由討論

〔司会〕 島崎武雄幹事



講演する北河氏（2005. 12. 17 撮影）

幹事選任について

11 月 26 日に開催した役員会において、田中富蔵氏が幹事に選任されました。

田中富蔵氏は、富津市役所に勤務されたあと、現在は、新井区長をされています。田中氏の祖父・父ともに大野組に勤務し、海堡建設に携わっていました。特に、祖父の田中富蔵（同名）氏は、陸軍築城部から第二海堡建設工事に対する表彰を受けています。

追浜ケーソンヤードでの活動

2005 年 11 月 12 日（土）と 19 日（土）に第三海堡の引き揚げ物が展示してある追浜ケーソンヤードが一般公開されました。会場で来場者に対し、ファンクラブの会員募集を行いました。両日とも、80 名（定員）の参加があり、熱心に第三海堡の引き揚げ物を見学していました。

ドンタクなしの海堡建設と富津の人々（遺稿）

高橋在久

本稿は、平成 16 年（2004）12 月 18 日に富津公民館で開催された「東京湾海堡シンポジウム」での講演用に高橋在久・前会長が書かれたものです。生前に事務局が預かっていましたので、ここに掲載いたします。

はじめに

間もなく 60 年になりますが、昭和 20 年（1945）8 月 15 日の、太平洋戦争終結までの、東京湾口の海堡と富津岬は、国土を守るための要塞で、普通の人達は立ち入り禁止でありました。ただし漁船だけは近づくことが許され、紅白の小旗を船にかかげて、魚介を採ったと伝えております。いならば、近代史のなかの東京湾口の光景であり、富津岬北の洲元で生まれた私の原風景でもあります。こうした少年期を経たあとに、文化財として注目し、こだわり始めて 40 年になりますが、海堡も富津岬も大きく変化しました。しかし、こうした機会を与えられましたので、東京湾学からの提言をいたします。

海堡の過去と現在

さて、海堡が建設された明治時代には、国土を守った海岸砲台が120ヶ所余りあったと、防衛研究所の原剛著『明治期国土防衛史』（錦正社）にあります。こうしたなかで東京湾口だけは、さらに3つの人工島の砲台が建設され、特に海堡と呼ばれてきました。富津市の第一海堡と第二海堡、横須賀市の第三海堡であります。うち第三海堡だけは、航路の安全確保のために、国土交通省が撤去工事をしており、間もなく日本の海堡は2つだけになります。

本日の資料の年表にもありますが、海堡は建設工事開始から113年になります。いわゆる近代の産物で古くはありませんが、歴史的・文化的には大きな貢献をしています。まず、飛行機出現以前の、大艦巨砲に頼った明治時代に、首都東京と横須賀軍港を外国艦船の攻撃から守るため、海堡と富津岬や観音崎などに砲台を築きました。明治の先覚者たちが想定したとおりで、ちょうど100年前の日露戦争では、ロシアのウラジオ艦隊が、房州や伊豆近海で商船を撃沈しておりますが、東京湾への侵攻は、海堡などの抑止力で防止したと『明治期国土防衛史』で評価されております。

さらに文化的、すなわち生活的には、海堡などが東京湾口の景相（景観）を形づくり、生きております。私は、富津岬を東京湾学の定点観察地に定め、時には鳥の目を借りて南の空から、東京湾口を考察しております。「東京湾口の家堡図」のとおり、東側に富津岬と2つの海堡、西側に観音崎や猿島があります。この状態を私は東京湾の海門と受けとめ、しかも今なお、漁船や外洋船がアテ（目標）にしていることも含め、東京湾口のランドマーク、すなわち湾口標識と総括し、文化的な資産（財産）だと評価しております。

海堡の建設と富津市

総括的なことはこの程度にして、与えられた主題に移りたいと思います。私の演題は「ドンタクなしの家堡建設と富津市の人々」ですが、海堡建設は人間だけではなく船や物資の提供など、関連する分野は多様だったと見ております。こうしたなかでまず、人々が参加した建設工事の日常ですが、かつて富津港で海堡節ともいえる、参加者の残した嘆き歌を拾いました。

わしが二海堡の 役人ならば あすはドンタク 総休み

という、文句の断片で調子も不明ですが、「ドンタク」すなわちオランダ語の「休日」もなく、海が時化ない限りは連日、

富津港から船で出勤したことを知りました。

すでに40年ほどになりますが、同じ頃、第一海堡の建設工事に富津港から、いつも200人くらいの人々が、5隻の船で出勤していたとも教えられました。ところが本日の準備過程で、正確な実態を知ることができました。国土交通省の東京湾口航路事務所の、海堡建設史調査の結果で大正3年（1914）の資料で、年代から第三海堡の建設工事と思われませんが、工員や作業員219人のうち、当時の富津村から92人、大貫村から50人、飯野村から12人、合計154人という、作業員全体に対し圧倒的な割合で、人々が今の富津市から出勤していたと判明しております。

さらに同じ調査資料のなかに、人間の外に砂運搬船が富津海岸から参加したという記録もありました。明治30年（1897）に、第二海堡建設用の砂運搬船30隻を、船主の森伝吉から佐久間清吉までの21名が、提供を約束した文書で知りました。百数年前のことですので、船主の子孫を探索したところ、このなかで二隻を提供した佐久間清吉は、なんと本日の主催者代表の一人、佐久間清治 富津市長の1字違いの先祖様と確認できました。重なる佐久間家の因縁と続く機縁まで感じております。

機縁といいましたが、しばらく追跡が続きますが、海堡建設史の新事実を富津市内で知りました。富津市西大和田の故鈴木一郎君は私の学友でしたが、この鈴木家のこれまた先祖様が海堡用の煉瓦づくりをしていたとの、伝承と遺物の煉瓦を確認することができました。詳細な調査がおわれれば発見と断定できると鈴木家の協力を期待しております。なお、こうした類似のこととして、富津市の渡辺茂さんによる燃料の薪、湊の砂利、金谷の石材の提供史もあり、実証的には後日を期している次第であります。

海堡中心の新風景

最後の提言になりますが、海堡中心の新風景ともいえます保護と活用について、構想している一端をお聞きます。私はまずこれからの新風景づくりの、基盤と論拠の確率が、緊急の課題だと考えております。すなわち文化財保護法によって、さきに総括しましたが、東京湾の海門でありランドマークの、海堡や富津岬などの総体を「重要文化的景観」に選定してもらうか、海堡や富津岬などを個別に、史跡などに指定してもらうか、いずれにしるこれからの行動の原理の具体化を切望しております。

こうした念願と共に私は、行動体としての「東京湾海門愛護協会」の設立を考え、新年早々には始動したいとも期して

おります。当面は文化財としての海門の評価の促進、実態調査の徹底、有効な活用事業の企画などを急ぎます。こうして順次広く海門の探訪を促して、海門が国土を守った歴史、富津岬の自然の構造、周辺の海の潮汐すなわち満ち引きの不思議、伝統的な漁業などを観察・学習したり、娯楽・体験できる、歴史学と生態学を軸にした、一大野外博物館を構想しております。

おわりに

以上、私は富津市の活性化と、観光立県ちばへの期待に限定し、東京湾学からの提示をいたしました。私の背後には、イギリスの自然の宝庫のセルボーン村、フランスの信仰地で要塞跡のモンサンミッシェルの小島が激励してくれておりますが、詳細は後日にゆずり略します。歴史とは背に回った未来であります。

「東京湾海堡シンポジウム」平成16年12月18日（土）
富津公民館

東京湾海堡ファンクラブ会則

第1条（名称）

当会の名称は、「東京湾海堡（とうきょうわんかいほう）ファンクラブ」とする。

第2条（目的）

当会は、東京湾海堡を核にして人の輪をつくり、東京湾海堡の歴史の検証と普及、遺跡の整備と愛護、ランドマークとしての理解を深め、東京湾の歴史と未来をつなぐことを目的とする。

第3条（事業）

当会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 東京湾海堡に関する研究会、講演会、見学視察会の実施。
- (2) 会報の発行（年4回）。
- (3) 東京湾海堡に関する資料・情報の収集。
- (4) その他、東京湾海堡への理解と愛護を深める活動。

第4条（会員）

当会の目的、事業に賛同する個人または法人（グループを含む）を会員とする。

第5条（入退会と会費）

当会に入会しようとするものは、入会申込書により会長に申込みものとする。会長は、正当な理由がない限り、その入会を認めなければならない。当会を退会しようとするものは、退会届けを会長に提出し、任意に退会することができる。会員は、下記の年間会費を納入する。

年間会費は、個人会員2,000円、法人会員10,000円とする。

会費は、毎年4月に支払うものとし、会費を支払わないときは退会したものとみなす。

既納の会費は、いかなる理由があっても返還しない。

第6条（総会）

総会は、当会の議決機関であり、年1回の通常総会および臨時総会とする。

- (1) 総会は、会員をもって構成する。
- (2) 総会は、会員の過半数を定足数とする。ただし、定足数については委任状をもって代えることができる。
- (3) 総会の議決は、出席した会員の過半数の賛同をもって行う。可否同数の場合は、議長が決するところによる。
- (4) 会長は総会を召集し、総会の議長を勤める。
- (5) 総会は、前年度の事業報告および収支決算の承認、当年度の事業計画および収支予算の決定、役員を選任、会則の変更、解散、合併、その他総会または役員会が必要と認める事項について議決を行う。

第7条（会員の権利）

会員は、次の権利を有する。

- (1) 総会に参加すること。
- (2) 研究会、講演会、見学視察会に参加すること。
- (3) 会報の無料配布を受けること。
- (4) 収集した資料・情報を閲覧すること。
- (5) その他、当会が行う東京湾海堡への理解を深める活動に参加すること。

第8条（資格の喪失）

会員が次の各号に該当するときは、その資格を喪失する。

- (1) 退会したとき。

第9条（役員）

当会は、役員として、会長1名、副会長1名、幹事（事務局長）、幹事（会計）を含め、15名以内の幹事をおく。

役員は会員から総会において選任する。役員は任期は通常総会から次の通常総会までとするが、再任を妨げない。

第10条（役員職務）

会長は、当会を代表し、その業務を総務する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。役員は役員会を組織し、当会の業務を行う。

第11条（会計）

当会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第12条（事務局）

当会の事務局事務所は、東京都台東区東上野2-7-6 東上野T.Iビル（株）地域開発研究所内におく。事務局には事務局員若干名をおく。事務局員は会長が選任する。

第13条（付則）

当会則は、2003年6月21日から改定実施する。

役員

- 会長 小坂一夫（富津市文化財審議委員）
副会長 朝倉光夫（東亜建設工業（株））
幹事 西田好孝（東京湾海堡建設従事者子孫代表）
幹事 仲野正美（横須賀市立衣笠小学校教頭）

幹事 安室真弓 (東京湾学会理事)
 幹事 松本庄次 (富津公民館長)
 幹事 小沢洋 (富津公民館主査)
 幹事 西田信吉 ((株) 港建技術サービス)
 幹事 長崎哲士 (彫刻家)
 幹事 勝 巖 (新横商事 (株))
 幹事 高橋克 (江戸川短期大学)
 幹事 渡辺京子 (富津藩の会幹事)
 幹事 田中富蔵 (新井区長)
 幹事 (事務局長) 島崎武雄 ((株) 地域開発研究所)
 幹事 (会計) 高橋悦子 ((株) 地域開発研究所)

大正 11 年 (1922) 2 月 1 日、山県は 85 歳の生涯を閉じますが、当時としては長寿でした。山県有朋の墓は、東京都文京区の護国寺にあります。お墓の周りは塀で囲まれ、門には鍵がかかっているのですが、塀の柵越しに覗くように見ると、夫人の墓とともに並んで立派な墓がありました。護国寺には、大隈重信や大倉喜八郎らの有名人のお墓が多くみられます。

【高橋悦子】

参考文献) 国土交通省東京湾口航路事務所『東京湾第三海堡建設史』

2005.3、pp.416~420

[次回は岩野泡鳴について紹介します。]

◆ コラム ◆

山県 有朋 (やまがた ありとも) (1838~1922)

“明治の元勳”と呼ばれた山県有朋は、陸軍省創設期 (明治 4 年(1871)~) に日本各地の海岸防御の必要性を強く主張していました。なかでも、東京湾の海岸防御が最重要であるとし、東京湾海堡建設に大きな影響力を及ぼした人物です。

山県は、天保 9 年 4 月 22 日(1838.6.14)に長州 (山口県) 萩に生まれました。山県は、元治 1 年 (1864)、英米仏蘭 4 国連合艦隊との交戦時に負傷したことを契機に、武器と兵制の改革の必要を痛感して、攘夷論から開国論に転じました。明治維新直後の明治 2 年から 3 年(1869~70)にかけて、西郷従道とともにパリ、ロンドン、ドイツ、ロシア、ベルギー、オランダ、アメリカを視察しています。この視察は、山県をいっそう国粋主義者にしただけでなく、西洋文明の移植・導入が日本にとっての緊急課題であると認識するきっかけとなりました。

山県有朋というと、軍服に勲章をたくさん付けた写真を思い出す方も多いと思います。写真からは年齢が分かりにくいのですが、どうしても年配のイメージが先行してしまいます。実際に、何歳だったかを確認してみると、初代陸軍卿に就任したのが明治 6 年(1873)、35 歳の時です。初代参謀本部長に就任したのが、明治 11 年(1878)で 40 歳、内閣総理大臣には明治 22 年(1889)、51 歳で就任しています。内閣総理大臣は 60 歳のときも再度就任しています。ちなみに、初代内閣総理大臣は伊藤博文 44 歳の時でした。現代と平均寿命が違うとはいえ、あらためて明治時代の指導者たちの年齢の若さを感じます。

年齢のことでさらに検証すると、西田明則と山県との年齢差は、西田が文政 10 年 11 月 23 日(1828.1.9)生まれなので、西田の方が 10 歳年上だったこととなります。陸軍での立場では山県が上位であったため、山県の方が年上であるような錯覚になりますが、実際の年齢などを想像しますと、それぞれの人物のイメージが膨らんでいきます。

皆さまからのお便りをお待ちしています。

「海堡」に投稿ください。葉書、手紙、E-mail、写真、ご意見、近況、作品、随筆など、事務局までお寄せ願います。

入会案内

東京湾海堡ファンクラブの活動主旨にご賛同いただける個人・法人 (グループを含む) の入会を募集しております。

入会希望者は、下記入事務局まで申込み用紙をご請求ください。申込み用紙は、ホームページ (<http://www.babu.jp/~kaihoufc/>) からでも入手できます。

会費は下記口座にご送金ください。

銀行振込口座

- 東京都民銀行 御徒町(オチマチ)支店 普通預金 4011598
「東京湾海堡ファンクラブ会計高橋悦子 (トウキョウワンカイハウファンクラブカイケイタカハシエツコ)」
 - 郵便局 00140-9-665909「東京湾海堡ファンクラブ」
- 会費(年間) 個人会員 : 2,000 円 法人会員 : 10,000 円

事務局 〒110-0015 台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル
 (株) 地域開発研究所内 東京湾海堡ファンクラブ事務局
 事務局長 : 島崎武雄 会計 : 高橋悦子
 電話 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048
 HomePage : <http://www.babu.jp/~kaihoufc/>
 E-mail : kaihoufc@babu.jp

「海堡」 *kaihou* No.12

—東京湾海堡ファンクラブニュース— 第 12 号

東京湾海堡ファンクラブ 2006 年 1 月 30 日発行